

## Another approach to the rationality of moduli of hyperelliptic curves

広島大 理 前田高士

上の題名の *another* というのは Bogomolov, Katysilo 氏の論文 [K], [B] の方法と異なるという意味ですが、講演で申しましたように、彼らのその後の共著の論文 [BK] の方法とは本質的に same であることに気がきました。御容赦下さい。最後の §5 では 5 次の対称群  $S_5$  と交代群  $A_5$  に対する、2 つのパラメータをもつ generic polynomial を具体的にかきました。

目次 §1. 有理性についての定理 §2. hyperelliptic curves の moduli の有理性の証明 (ただし  $\text{genus} \geq 3, \text{char}(k) = 0$  の場合) §3. 有限群への応用 §4. §2 の証明において、§1 の定理の仮定の条件 (3) をみたすことについて §5.  $S_5$  と  $A_5$  の generic polynomial について

### §1.

この § では [BK] の Theorem 2.1 (descent についての定理) の証明をします。

Theorem 2.1 体  $k$  上の線形代数群  $G$  の線形表現  $P_{\frac{1}{2}}: G \rightarrow GL(V_{\frac{1}{2}})$

に対して 次の条件 (1)~(3) をみたす  $G$  の別の線形表現 " $\rho_2: G \rightarrow GL(V_2)$ "

と、 $G$ -sub module " $W$ " of  $V_1 \otimes_{\mathbb{R}} V_2$  をみつける:

(1)  $\dim V_1 \geq \dim V_2 = \dim W + 1$

(2)  $V_2$  に associate する  $\mathbb{R}$  上の射影空間  $\mathbb{P}(V_2)$  の上への、 $\rho_2$  によつて induce される  $G$  の作用は generically free. (これは  $G$  の affine space  $V_2$  への作用が generically free という、もっと弱い条件で十分。)

(3)  $V_1, V_2$  の  $\mathbb{R}$ -basis を各々  $\{a_i\}_{i=1}^m, \{b_j\}_{j=1}^m$  ( $m = \dim V_1, m = \dim V_2$ ),  $W$  の  $\mathbb{R}$ -basis を  $\{f_k\}_{k=1}^{m-1}$  とし、

$$(1.1) \quad \begin{bmatrix} f_1 \\ \vdots \\ f_{m-1} \end{bmatrix} = A \cdot \begin{bmatrix} b_1 \\ \vdots \\ b_m \end{bmatrix} = B \cdot \begin{bmatrix} a_1 \\ \vdots \\ a_m \end{bmatrix}$$

と展開する。(ここで、 $A$  は  $(m-1) \times m$  行列で成分は  $V_1$  の元、 $B$  は  $(m-1) \times m$ -行列で成分は  $V_2$  の元。)  $\mathbb{P}(V_1), \mathbb{P}(V_2)$  の同次座標を各々  $(a_1: \dots: a_m), (b_1: \dots: b_m)$  とするとき、 $\mathbb{P}(V_1) \times \mathbb{P}(V_2)$  の点  $(a, b)$  で、

$$f_k(a, b) = 0 \quad (1 \leq k \leq m-1), \quad \text{rank } A(a) = \text{rank } B(b) = m-1$$

なるものが存在する。

⇒ 結論:  $G$ -同変 dominant 有理写像  $\varphi: \mathbb{P}(V_1) \rightarrow \mathbb{P}(V_2)$  で、 $\bar{\varphi}: \mathbb{P}(V_1)/G \rightarrow \mathbb{P}(V_2)/G$  が  $(n-m)$ -rational (つまり南数体の不変体の拡大  $k(\mathbb{P}(V_1))^G \xrightarrow{\varphi^*} k(\mathbb{P}(V_2))^G$  が  $(n-m)$ -次元純超越拡大) になるものが存在する。よつて、もし、 $\mathbb{P}(V_2)/G$  が有理多様体であることがわかれば、 $\mathbb{P}(V_1)/G$  も有理的であることが結論できる。

(言証明)  $X := \{(a, b) \in \mathbb{P}(V_1) \times \mathbb{P}(V_2) \mid f_k(a, b) = 0, 1 \leq k \leq m-1\} \stackrel{\text{dos.}}{\subset} \mathbb{P}(V_1) \times \mathbb{P}(V_2)$   
 $\cup \text{open}$   
 $\mathcal{U} := \{(a, b) \in X \mid \text{rank } A(a) = \text{rank } B(b) = m-1\}$

とかくと、条件(3)より、 $\mathcal{U} \neq \emptyset$ である。Xから各成分への射影写像  $\pi_i: X \rightarrow \mathbb{P}(V_i)$  ( $i=1, 2$ ) とすると、X,  $\mathcal{U}$ 、A, Bの定義より、

$$\mathcal{U} = \{x = (a, b) \in X \mid \pi_1^{-1}\pi_1(x) = \{x\}, \pi_2^{-1}\pi_2(x) \cong \mathbb{P}^{m-m}\}$$

である。次に

$$\mathbb{P}(V_2) = \text{Proj } S, \quad S = k[b_1, \dots, b_m] = \bigoplus_{d \geq 0} S_d, \quad S_d \text{ は } k \text{ 上の } V_2 \text{ の symm. alg. の } d \text{ 次部分.}$$

とかくと inclusion  $W \subset V_1 \otimes V_2 = V_1 \otimes S_1$  に  $\bigotimes_{d \geq 1} S_{d-1}$  を施して、 $W \otimes S_{d-1} \subset V_1 \otimes S_d \otimes S_{d-1} \rightarrow V_1 \otimes S_d$  を作る ( $d \geq 1$ )。dについて和をとると、graded S-module の完全列

$$W \otimes S(-1) \xrightarrow{\psi} V_1 \otimes S \rightarrow M \rightarrow 0$$

が成り立つ。(ここで  $M = \text{Cok}(\psi)$  とおいた。) よって、これを sheafify して、 $\mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)}$ -module の完全列

$$(1.2) \quad W \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)}(-1) \rightarrow V_1 \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)} \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow 0, \quad \mathcal{F} = \widetilde{M}$$

が成り立つ。Wのbasisは  $\{f_k\}$  であるから、この完全列によって induce される  $\mathbb{P}(V_1 \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)}) \cong \mathbb{P}(V_1) \times \mathbb{P}(V_2)$  の closed sub scheme  $\mathbb{P}(\mathcal{F}) = \text{Proj}(S^*\mathcal{F})$  ( $S^*\mathcal{F}$  は symm. alg. of  $\mathcal{F}$  over  $\mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)}$ ) は scheme として、同次イデアル  $(f_1, \dots, f_{m-1})$  で定義される。(i.e.  $\mathbb{P}(\mathcal{F})_{\text{red}} = X$ ) Xの既約成分  $X_0$  で  $X_0 \cap \mathcal{U} \neq \emptyset$  なるものをとり、 $X_0 \cap \mathcal{U} = \mathcal{U}_0$  とかく。

Xは  $(m-1)$  枚の超曲面  $\{f_k=0\}$  の完全交わり  $\mathbb{P}(V_1) \times \mathbb{P}(V_2)$  であるから  $\dim X_0 \geq n$  は明らかである。  $\mathcal{U}_0 \neq \emptyset$  と、fibreの次元の上半連続性

から  $\dim X_0 \leq n$  がわかる。よって  $\dim X_0 = n$  で  $\pi_1|_{X_0}: (X_0)_{\text{red}} \rightarrow \mathbb{P}(V_1)$  は  
 双有理に在る。  $X = \mathbb{P}(\mathcal{F})_{\text{red}} (\subset \mathbb{P}(V_1) \times \mathbb{P}(V_2))$  の affine cone の上の点  $(a, b)$   
 での Jacobian は、

$$\frac{\partial (f_1, \dots, f_{m-1})}{\partial (b_1, \dots, b_m, a_1, \dots, a_n)} = (A(a), B(b))$$

であるから、 $\mathcal{V}$  の定義より  $\mathcal{V}$  (および  $\mathcal{V}_0$ ) は Jacobian criterion により非特異で、  
 $\mathcal{V}_0$  は reduced である。また  $\pi_2|_{\mathcal{V}_0}: \mathcal{V}_0 \rightarrow \mathbb{P}(V_2)$  は smooth であるから、 $\pi_2(\mathcal{V}_0)$   
 は  $\mathbb{P}(V_2)$  の open set である。以上より次の可換図式が得られる。

$$(1.3) \quad \begin{array}{ccccc} \mathbb{P}(V_1) & \xleftarrow{\pi_1} & X = \mathbb{P}(\mathcal{F})_{\text{red}} & \xrightarrow{\pi_2} & \mathbb{P}(V_2) & \mathcal{F} \\ & \searrow \pi_1' & \uparrow & \uparrow \tau_2 & \uparrow \tau_3 & \\ & & \mathcal{V}_0 & \xrightarrow[\tau_1]{\hookrightarrow} & \mathbb{P}(\mathcal{F}|_{\pi_2 \mathcal{V}_0}) & \longrightarrow & \pi_2(\mathcal{V}_0) & \mathcal{F}|_{\pi_2 \mathcal{V}_0} \end{array}$$

ここで  $\tau_1, \tau_2, \tau_3$  は open immersion で  $\pi_1'$  は birational morphism。  $\mathcal{F}|_{\pi_2 \mathcal{V}_0}$  は  
 $\text{rank}(n-m+1)$  の locally free sheaf である。完全列 (1.2) の左端も完全

$$(1.4) \quad 0 \rightarrow W \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)}(-1) \rightarrow V_1 \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)} \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow 0$$

であることは容易にわかる。今、 $G$  の regular action をもつ variety  $\mathbb{P}(V_2)$  に  
 対して、 $G$ -modules  $W$  と  $V_1$  は  $W \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)}(-1)$  と  $V_1 \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)}$  に自然な  $G$ -linearli-  
 zation を与える。よって完全列 (1.4) は  $\mathcal{F}$  に  $G$ -linearization を induce する。  
 よして、この  $G$ -linearization によって induce される  $G$  の  $\mathbb{P}(\mathcal{F})$  への作用は、  
 もともとの  $G$  の作用と一致する。つまり closed immersion  $\mathbb{P}(\mathcal{F}) \hookrightarrow \mathbb{P}(V_1 \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}(V_2)})$   
 $= \mathbb{P}(V_1) \times \mathbb{P}(V_2)$  は  $G$ -同変である。  $\mathcal{V}$  と  $X_0$  は  $G$ -不変で、 $\pi_2$  は  $G$ -同変なので

$\pi_2(U_0)$  は  $\mathbb{P}(V_2)$  の  $G$ -不変 open set である。よって (1.4) の  $\pi_2(U_0)$  への制限も  $G$ -linearization をもつ。一方、条件 (2) より  $\pi_2(U_0)$  の  $G$ -不変 open set  $U_1$  と、geometric quotient  $U_1/G$  が存在して、 $\tau: U_1 \rightarrow U_1/G$  は principal  $G$ -bundle in étale topology となる。ゆえに descent によって、 $G$ -linearized locally free sheaf  $\mathcal{F}|_{U_1}$  は  $U_1/G$  からやってくる。つまり locally free sheaf  $\mathcal{F}'$  on  $U_1/G$  で、 $\tau^*\mathcal{F}' \cong \mathcal{F}|_{U_1}$  となるものが存在する。よって次の可換図式

$$(1.5) \quad \begin{array}{ccccc} \mathbb{P}(\mathcal{F}) \supset \mathbb{P}(\mathcal{F}|_{U_1}) & \longrightarrow & \mathbb{P}(\mathcal{F}') & & \\ \downarrow & & \downarrow & \searrow \mu & \\ \mathbb{P}(V_2) \supset U_1 & \xrightarrow{\tau} & U_1/G & & \end{array}$$

が得られる。(1.3) と (1.5) より、

$$\mathbb{P}(U_1)/G \sim U_1/G \sim \mathbb{P}(\mathcal{F}|_{U_1})/G \cong \mathbb{P}(\mathcal{F}') \xrightarrow{\mu} U_1/G \sim \mathbb{P}(U_2)/G$$

となり、 $\mu$  は Zariski topology で locally trivial だから、結局、 $U_0$  の閉包を  $\varphi$  とする有理写像を  $\varphi$  とすればよい。

Remark (1) §2, §3 で使う idea はこの定理だけだ。

(2)  $\varphi$  は (1.1) = 0 から  $\{b_j\}$  を消去すればよいので、具体的には

$$\varphi: \mathbb{P}(V_1) \ni (a) \mapsto (A_1: -A_2: \cdots: (-1)^{m+1}A_m) \in \mathbb{P}(V_2)$$

となる。ここで  $A_i$  は  $A$  から  $i$  列を除いた  $m \times m$  行列の行列式。

(3)  $G$ -同変 bilinear map  $V_1 \otimes V_2 \rightarrow W$  を彼らは "double bundle" と呼んでいる [B.K.]。

§2. hyperelliptic curve の moduli の有理性の証明 (genus  $\geq 3$ , char( $k$ ) = 0 のとき)

§2 では  $k$  の標数は 0 とする。(  $k = \mathbb{Q}$  でよい。)

射影直線  $\mathbb{P}^1$  上の相異なる  $(2g+2)$  個の点  $\{\alpha_i\}_{i=1}^{2g+2}$  に対して、平面曲線  $y^2 = \prod_{i=1}^{2g+2} (x - \alpha_i)$  ( $\alpha_i \neq \infty$  とした) の正規化  $C_{(\alpha)}$  は genus  $g$  の hyperelliptic curve であり、 $C_{(\alpha)} \cong C_{(\beta)}$ : "同型"  $\leftrightarrow \{\alpha_i\}$  と  $\{\beta_i\}$  は  $\text{Aut}(\mathbb{P}^1)$  で同値。また任意の hyperelliptic curve は上のようになり得られる。よって  $\mathbb{P}^1$  の  $(2g+2)$  個の symmetric product modulo  $\text{Aut}(\mathbb{P}^1) = \text{PGL}(2, k)$  は genus  $g$  の hyperelliptic curve の moduli space  $M_{g, \text{hyell}}$  と birational になる:  $M_{g, \text{hyell}} \sim (\mathbb{P}^1)^{(2g+2)} / \text{PGL}(2, k)$ 。

一方、 $(n+1)$  次元ベクトル空間  $V(n)$  を  $\text{SL}(2, k)$  の  $n$ -th 対称テンソル表現空間とすると、 $\mathbb{P}(V(2g+2))$  と  $(\mathbb{P}^1)^{(2g+2)}$  は  $\text{PGL}(2, k)$ -同変に同型だから  $\mathbb{P}(V(2g+2)) / \text{PGL}(2, k)$  が有理多様体であることを示すことに帰着した。

以下、これを示す。 Remark:  $n$  が even のとき  $V(n)$  は  $\text{PGL}(2, k)$ -module とみなせる。

(1)  $n = 2g+2 \geq 10$  のとき、§1 の定理で  $G = \text{PGL}(2, k)$ ,  $V_1 = V(n)$ ,  $V_2 = V(n-2)$  とする。Clebsch-Gordan の定理より、 $G$ -module  $V_1 \otimes V_2$  の既約成分への分解は

$$V_1 \otimes V_2 = V(2n-2) \oplus V(2n-4) \oplus \cdots \oplus V(n-6) \oplus \cdots \oplus V(4) \oplus V(2) \quad (2g \text{ 下ろす})$$

となる。そこで、 $W = V(n-6) \oplus V(2)$  とおくと、定理の条件 (1)~(3) をみたすことがわかる。条件 (1) は明らかで、(2) も  $n \geq 10$  だから成立つ。(3) に



で  $m=8$  の場合は示された。よって任意の  $m$  (even) の場合についても示された。

Remark (1)  $g=2$  (i.e.  $\mathbb{P}(V(6))/G \sim \mathbb{P}^3$  については、Clebsch, Gordan によって、  
具体的な生成元まで調べられている。

(2)  $g=3$  について、binary 8-form の 不変式環 は、塩田先生により、  
完全に決定されている [S]。しかし、その結果から、 $\mathbb{P}(V(8))/G$  の有理性は  
読みとることができない (筆者には)。

(3) §1 の定理の証明で descent を使っているのと同じ方法では、具体的な  
生成元は 代数的に独立なものを わからないと思う。(  $g=3$  のときでも )

(4)  $\text{char}(k) > 0$  の場合も、条件 (3) が確認できれば成立。上の証明で  
使った  $V_2, W$  ではあやしいと思う。

(5) Bogomolov, Katysilo 氏の論文 [B, K] では次のようにしている (cf. §4)。  $P \geq 0$   
として、

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{(i)} \quad V_1 = V(6P+8), \quad V_2 = V(2P+2) \oplus V(2P+4), \quad W = V(4P+6) \\ \text{(ii)} \quad V_1 = V(6P+10), \quad V_2 = V(2P+2) \oplus V(2P+6), \quad W = V(4P+8) \\ \text{(iii)} \quad V_1 = V(6P+12), \quad V_2 = V(2P+2) \oplus V(2P+8), \quad W = V(4P+10), \end{array} \right.$$

ここで、例えば (i) では  $V(6P+8) \otimes V(2P+2)$  と  $V(6P+8) \otimes V(2P+4)$  は  $V(4P+6)$   
を含むので、 $V_1 \otimes V_2 \supset V(4P+6) \oplus V(4P+6) \xrightarrow{\text{diagonal}} V(4P+6) := W$  とする。(ii), (iii) の  $W$   
についても同様。

(6) Katysilo, Bogomolov 氏の最初の論文 [K], [B] では、4次の対称群  $S_4$  による、  
ある不変体を計算することに帰着させていた。



(7)  $m: \text{odd}$  のときの  $\mathbb{P}(V(m))/G \sim \mathbb{P}^{m-2}$  は Katsylo 氏の論文 [ ] にある。

### §3. 有限群への応用

この § では、係数体  $k$  は  $\text{char}(k) = 0$  の代数閉体とする。次の問題を考える:

(\*)  $\left[ \begin{array}{l} \text{有限群 } G \text{ に対して、} G \text{ の任意の線形表現 } \rho: G \rightarrow \text{GL}(V) \text{ に} \\ \text{対して、} \mathbb{P}(V)/G \text{ は有理多様体か?} \end{array} \right.$

この問題には別に深い意味や応用はない ( $G$  がある  $P$ -群 ( $P$  は素数) について反例も知られている) が、講演の最後に触れた S. Barron 氏と、Miroshnichenko 氏の結果を言及すると、正二十面体群  $\widetilde{A}_5$  (5 次交代群  $A_5$  の  $\mathbb{Q}/2\mathbb{Z}$  による中心拡大) と、5 次対称群  $S_5$  について、(\*) が成立つことを説明する。なお descent により、 $G$  の任意の既約表現について示せばよいことは容易にわかる。

5 次交代群  $A_5$  は単位表現  $1_{A_5}$  の他に 4 つの既約表現  $\rho_3^+, \rho_3^-, \rho_4, \rho_5$  をもつ (ここで  $\dim \rho_i = d$ )。  $\rho_4$  と  $\rho_5$  は具体的には、

$\rho_4 \oplus 1_{A_5} = (1_{A_4})^{A_5}$ : 4 次交代群と同型の  $A_5$  の部分群  $A_4$  の  $A_5$  への誘導表現  
(つまり、ふつうの置換表現)

$\rho_5 = \chi^{A_5}$ :  $\chi$  は  $A_4$  の non-trivial 指標 (よって単項表現)

$\rho_5 \otimes 1_{A_5} = (1_{D_{10}})^{A_5}$ :  $1_{D_{10}}$  は位数10の正四面体群と同型な  $A_5$  の部分群  $D_{10}$  の単位表現。

$\rho_5: A_5 \xrightarrow{\theta} \text{PGL}(2, \mathbb{C}) \xrightarrow{\Delta^{(4)}} \text{SL}(V(4)) = \text{SL}(5, \mathbb{C})$ :  $\theta$  は  $A_5$  の2次元射影表現,  
 $\Delta^{(4)}$  は  $\text{SL}(2, \mathbb{C})$  の4-th 対称テンソル表現

などと表わされる。そこで §1 の定理で:  $G = A_5$ ,  $V_2 = V(\rho_5)$  ( $\rho_5$  の表現空間)  
 $V_2 = V(\rho_4)$  とおく。  $A_5$  の character table はすでに言及べられて  $\rho_5 \otimes \rho_4 =$   
 $\rho_3^+ \oplus \rho_3^- \oplus \rho_4 \oplus \rho_5 \oplus \rho_5$  となる。そこで  $W = V(\rho_3^+)$  とおくと再び条件(1)~(3)  
をみたすことがわかる。条件(3)についてはあとで具体的な形を与えよう。  
よって  $\mathbb{P}(V(\rho_5))/A_5 \rightarrow \mathbb{P}(V(\rho_4))/A_5$  は 1-national となる。次に去年の1月の  
東大でのシンポジウムで本質的には話したことがあるが:  $\mathbb{P}(V(\rho_4))/A_5 \sim \mathbb{P}^3$   
とすることを言説明する。  $G = \text{PGL}(2, \mathbb{C})$  として、  $A_5 \times G$  を  $(\mathbb{P}^1)^5$  へ

$$\begin{cases} \sigma. (z_0, \dots, z_4) = (z_{\sigma(0)}, \dots, z_{\sigma(4)}) & \text{for } \sigma \in A_5 \\ g. (z_0, \dots, z_4) = \left( \frac{\gamma + \delta z_0}{\alpha + \beta z_0}, \dots, \frac{\gamma + \delta z_4}{\alpha + \beta z_4} \right) & \text{for } g = \begin{bmatrix} \alpha & \beta \\ \gamma & \delta \end{bmatrix} \in G \end{cases}$$

と作用させた。ここで  $z_i$  は  $i$ -th factor の非同次座標。すると  $\sum_{i=0}^4 z_i$  は  
 $A_5$ -不変 linear form (つまり  $V(1_{A_5})$  の base) なの。  $(\mathbb{P}^1_{z_i})^5 \xrightarrow{\text{open}} (A^1_{z_i})^5 \cong V(\rho_4 \otimes 1_{A_5})$   
の 4-dim. linear sub space  $V(\rho_4)$  は  $\sum_{i=0}^4 z_i = 0$  で定義される。次に  $G$  の  
下三角行列  $B = G_\alpha \times G_\delta$ ,  $G_\alpha = \left\{ \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ \gamma & 1 \end{bmatrix} \right\}$ ,  $G_\delta = \left\{ \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & \delta \end{bmatrix} \right\}$  とおく。  $z = (z_0, \dots,$   
 $z_4) \in V(\rho_4)$ ,  $\begin{bmatrix} 1 & 0 \\ \gamma & 1 \end{bmatrix}. z = (\gamma + z_0, \dots, \gamma + z_4) \in V(\rho_4)$  とおくと、  $0 = 5\gamma + \sum_{i=0}^4 z_i = 5\gamma$   
よって  $\gamma = 0$ , よって  $\forall z \in V(4)$  に對して  $\{z\}$  の  $G_\alpha$ -orbit  $\} \cap V(\rho_4) = \{z\}$  となり、  
 $V(\rho_4)$  は  $G_\alpha \backslash (\mathbb{P}^1)^5$  の rational section である。よって  $V(\rho_4) \cong G_\alpha \backslash (\mathbb{P}^1)^5$  は 双有理

に存るか、これは  $G_m \times A_5$ -同変なので、 $\mathbb{P}(V(P_4))/A_5 \sim \mathbb{P}(V(P_4)/G_m)/A_5 = B \backslash (\mathbb{P}^1)^5/A_5$  と存る。一方、1月には言ったように  $(\mathbb{P}^1)^5/A_5$  は principal  $G$ -bundle in Zariski topology と birational  $(\mathbb{P}^1)^5/A_5 \sim G \times G \backslash (\mathbb{P}^1)^5/A_5$  だ。よって、

$$\mathbb{P}(V(P_4))/A_5 \sim B \backslash (\mathbb{P}^1)^5/A_5 \sim (B \backslash G) \times (G \backslash (\mathbb{P}^1)^5/A_5) \sim \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^2$$

で  $\mathbb{P}(V(P_4))/A_5$  の有理性がわかった。よって  $\mathbb{P}(V(P_5))/A_5$  も有理的に存る。

あまり意味はないと思いますが、 $\mathbb{P}(V(P_4))/A_5$  の4個の生成元を書いておきます。まず、 $A_5$  は2つの元  $\sigma$  と  $\tau$  で生成される。(関係式は  $\sigma^5 = \tau^2 = (\sigma\tau)^3 = 1$ ) 以下、 $\zeta$  を1の原始5乗根として、 $b = \zeta + \zeta^4 = (-1 + \sqrt{5})/2$ ,  $b^* = \zeta^2 + \zeta^3 = (-1 - \sqrt{5})/2$  とおく。  $P_5 : A_5 \xrightarrow{\theta} \text{PGL}(2, \mathbb{C}) \xrightarrow{\Delta^{(4)}} \text{SL}(5, \mathbb{C})$  により  $P_5$  の行列を計算すると、

$V(P_5)$  の basis  $x_0, \dots, x_4$  に対して、

$$\begin{pmatrix} x_0 \\ \vdots \\ x_4 \end{pmatrix}^{\sigma} = \begin{pmatrix} \zeta^2 & & & & \\ & \zeta & & & \\ & & 1 & & \\ & & & \zeta^4 & \\ & & & & \zeta^3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ \vdots \\ x_4 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} x_0 \\ \vdots \\ x_4 \end{pmatrix}^{\tau} = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} b^{*2} & b^* & 1 & b & b^2 \\ 4b^* & b^2 & 2 & b^{*2} & 4b \\ 6 & 3 & -1 & 3 & 6 \\ 4b & b^{*2} & 2 & b^2 & 4b^* \\ b^2 & b & 1 & b^* & b^{*2} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ \vdots \\ x_4 \end{pmatrix}$$

と表わされる。次に  $V(P_4 \oplus 1_{A_5}) = V((1_{A_5})^{A_5})$  の basis  $z_0, \dots, z_4$  として、permutation basis をとり、

$$\begin{pmatrix} y_0 \\ y_1 \\ \vdots \\ y_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ \zeta^2 & \zeta & 1 & \zeta^4 & \zeta^3 \\ \zeta^2 & 1 & \zeta^3 & \zeta & \zeta^4 \\ \zeta^2 & \zeta^4 & \zeta & \zeta^3 & 1 \\ \zeta^2 & \zeta^3 & \zeta^4 & 1 & \zeta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} z_0 \\ z_1 \\ \vdots \\ z_4 \end{pmatrix}$$

とみると、 $y_1, y_2, y_3, y_4$  が  $V(P_4) (\subset V(P_4 \oplus 1_{A_5}))$  の basis に存る。すると、

$$\begin{pmatrix} Y_1 \\ Y_2 \\ Y_3 \\ Y_4 \end{pmatrix}^{\sigma} = \begin{pmatrix} \zeta \\ & \zeta^2 \\ & & \zeta^3 \\ & & & \zeta^4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} Y_1 \\ Y_2 \\ Y_3 \\ Y_4 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} Y_1 \\ Y_2 \\ Y_3 \\ Y_4 \end{pmatrix}^{\tau} = \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{pmatrix} 1 & b & -b^* & -1 \\ b & -1 & 1 & -b^* \\ -b^* & 1 & -1 & b \\ -1 & -b^* & b & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} Y_1 \\ Y_2 \\ Y_3 \\ Y_4 \end{pmatrix}$$

となる。そこで: 20-dim. vector space  $V(P_5) \otimes V(P_4) = \langle x_i \otimes y_j \rangle_{\mathbb{R}}$  の 3-dim sub space

で:  $\sigma$  と  $\tau$  で stable なものを とにかく計算して探す。

$$\begin{cases} f_1 = x_2 y_1 - x_3 y_2 - 3x_4 y_2 + x_0 y_4 \\ f_2 = x_3 y_1 - x_4 y_2 + x_0 y_3 - x_1 y_4 \\ f_3 = x_4 y_1 - 3x_0 y_2 - x_1 y_3 + x_2 y_4 \end{cases}$$

とかくと

$$\begin{pmatrix} f_1 \\ f_2 \\ f_3 \end{pmatrix}^{\sigma} = \begin{pmatrix} \zeta & & & \\ & 1 & & \\ & & \zeta^2 & \\ & & & \zeta^3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f_1 \\ f_2 \\ f_3 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} f_1 \\ f_2 \\ f_3 \end{pmatrix}^{\tau} = \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{pmatrix} b^* & 2 & -b \\ 1 & 1 & -1 \\ -b & -2 & b^* \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f_1 \\ f_2 \\ f_3 \end{pmatrix}$$

となることか分かる。つまり

$$A = \begin{pmatrix} x_2 & -x_3 & -3x_4 & x_0 \\ x_3 & -x_4 & x_0 & -x_1 \\ x_4 & -3x_0 & -x_1 & x_2 \end{pmatrix}, \quad B = \begin{pmatrix} y_4 & 0 & y_1 & -y_2 & -3y_3 \\ y_3 & -y_4 & 0 & y_1 & -y_2 \\ -3y_2 & -y_3 & y_4 & 0 & y_1 \end{pmatrix}$$

で:  $A_5$ -同変有理写像  $\varphi: \mathbb{P}_x^4 = \mathbb{P}(V(P_5)) \rightarrow \mathbb{P}_y^3 = \mathbb{P}(V(P_4))$  は、

$$\varphi(x) = (A_1 : -A_2 : A_3 : -A_4)$$

$$(3.1) \quad = \left( \begin{array}{c|c|c|c} \begin{vmatrix} -x_3 & -3x_4 & x_0 \\ -x_4 & x_0 & -x_1 \\ -3x_0 & -x_1 & x_2 \end{vmatrix} & : - & \begin{vmatrix} x_2 & -3x_4 & x_0 \\ x_3 & x_0 & -x_1 \\ x_4 & -x_1 & x_2 \end{vmatrix} & : + & \begin{vmatrix} x_2 & -x_3 & x_0 \\ x_3 & -x_4 & -x_1 \\ x_4 & -3x_0 & x_2 \end{vmatrix} & : - & \begin{vmatrix} x_2 & -x_3 & -3x_4 \\ x_3 & -x_4 & x_0 \\ x_4 & -3x_0 & -x_1 \end{vmatrix} \end{array} \right)$$

と表わされる。一方、 $\mathbb{P}(V(P_4))/A_5 \sim \mathbb{B}^G \times \mathbb{G}^{\mathbb{P}^3}/A_5$  より、

$$\begin{aligned} \mathbb{R}(\mathbb{P}(V(P_4))/A_5) &= \mathbb{R}(y_1, y_2, y_3, y_4)^{\mathbb{G}_m \times \mathbb{P}^3(A_5)} = \mathbb{R}(z_0, z_1, \dots, z_4)^{\mathbb{B} \times A_5} \\ &= \mathbb{R}(I_4/\Delta, I_{12}/\Delta^3, B_0/\Delta^2 A_0) \end{aligned}$$

そこで、

$$\Delta = \prod_{i < j} (z_i - z_j),$$

$$I_4 = \sum_{\sigma \in S_5} \left\{ (z_0 - z_1)^2 (z_0 - z_2)^2 (z_1 - z_2)^2 (z_3 - z_4)^4 \right\}^{\sigma},$$

$$I_{12} = \sum_{\sigma \in S_5} \left\{ (z_0 - z_1)^2 (z_0 - z_2)^2 (z_1 - z_2)^2 (z_0 - z_1)^4 (z_0 - z_2)^4 (z_0 - z_3)^4 (z_0 - z_4)^4 (z_1 - z_4)^4 (z_2 - z_4)^4 \right\}^{\sigma},$$

$$A_0 = \sum_{\sigma \in S_5} \left\{ (z_0 - z_1)(z_0 - z_2)(z_0 - z_3)(z_0 - z_4)(z_1 - z_2)^4 (z_3 - z_4)^4 \right\}^{\sigma},$$

$$B_0 = \sum_{\sigma \in S_5} \left\{ (z_0 - z_1)^3 (z_0 - z_2)^3 (z_0 - z_3)^3 (z_0 - z_4)^3 (z_1 - z_2)^0 (z_3 - z_4)^0 \right\}^{\sigma}.$$

よって、 $\mathbb{R}(P(V(P_5))/A_5) = \mathbb{R}(x_0, \dots, x_4)^{G_m \times P_5(A_5)}$  の4個の生成元のうちの3個は、 $I_4/\Delta^4$ ,

$I_{12}/\Delta^3$ ,  $B_0/\Delta^3 A_0$  の  $\{z_i\}_{i=0}^4$  に、

$$\begin{pmatrix} z_0 \\ z_1 \\ z_2 \\ z_3 \\ z_4 \end{pmatrix} = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} 1 & \zeta^3 & \zeta^3 & \zeta^3 & \zeta^3 \\ 1 & \zeta^4 & 1 & \zeta & \zeta^2 \\ 1 & 1 & \zeta^2 & \zeta^4 & \zeta \\ 1 & \zeta & \zeta^4 & \zeta^2 & 1 \\ 1 & \zeta^2 & \zeta & 1 & \zeta^4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ \gamma_1 \\ \gamma_2 \\ \gamma_3 \\ \gamma_4 \end{pmatrix}$$

を代入して、 $\{\gamma_i\}_{i=1}^4$  の有理数数として、 $z_i \mapsto A_i$  ((3.4)) とし、 $x_i$  の有理数

数としたものである。  $\bar{\varphi}: P(V(P_5))/A_5 \rightarrow P(V(P_4))/A_5$  は 1-cocycle であつたが、

これが残りの1つの生成元である。これも次のように 1-cocycle が 具体的に

にわかるので、ほぼ explicit にわかる。行列 B の  $\beta_i$  列、 $\beta_j$  列、 $\beta_k$  列を

左から順に並べてできた3次正方行列の行列式を  $B_{ijk}$  とすると、 $f_i = 0$  ( $i=1, 2, 3$ )

から、

$$\begin{cases} B_{234} x_1 + B_{134} x_0 + B_{523} x_4 = 0 \\ B_{123} x_2 + B_{103} x_0 + B_{143} x_4 = 0 \\ B_{123} x_3 + B_{120} x_0 + B_{124} x_4 = 0 \end{cases}$$

となるので

$$(3.2) \quad \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} = \frac{1}{B_{234}} \begin{pmatrix} B_{023} & B_{234} \\ -B_{013} & -B_{134} \\ B_{012} & B_{124} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_4 \end{pmatrix}$$

である。\$A\_5\$ の 2次元射影表現を \$\theta\$ とし、\$A\_5 \ni v \mapsto \theta(v) = \begin{bmatrix} \alpha\_v & \beta\_v \\ \gamma\_v & \delta\_v \end{bmatrix} \in \text{PGL}(2, \mathbb{k})\$

\$\alpha\_v \delta\_v - \beta\_v \gamma\_v = 1\$, とおくと、

$$\rho_5^v = \rho^{(4)}(\theta(v)) = \begin{pmatrix} \alpha_v^4 & \alpha_v^3 \beta_v & \alpha_v^2 \beta_v^2 & \alpha_v \beta_v^3 & \beta_v^4 \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ \gamma_v^4 & \gamma_v^3 \delta_v & \gamma_v^2 \delta_v^2 & \gamma_v \delta_v^3 & \delta_v^4 \end{pmatrix} \in \text{SL}(5, \mathbb{k})$$

であるから、

$$\begin{pmatrix} x_0 \\ x_4 \end{pmatrix}^{\rho} = \begin{pmatrix} \alpha_v^4 & \alpha_v^3 \beta_v & \dots & \beta_v^4 \\ \gamma_v^4 & \gamma_v^3 \delta_v & \dots & \delta_v^4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_1 \\ \vdots \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \alpha_v^4 & \beta_v^4 \\ \gamma_v^4 & \delta_v^4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_4 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \alpha_v^3 \beta_v & \alpha_v^2 \beta_v^2 & \alpha_v \beta_v^3 \\ \gamma_v^3 \delta_v & \gamma_v^2 \delta_v^2 & \gamma_v \delta_v^3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}$$

ここで、(3.2) を \$(x\_1, x\_2, x\_3)\$ に代入すると、

$$\begin{pmatrix} x_0 \\ x_4 \end{pmatrix}^{\rho} = A_v \cdot \begin{pmatrix} x_0 \\ x_4 \end{pmatrix}$$

$$A_v = \frac{1}{B_{234}} \begin{pmatrix} (B_{123}, -B_{023}, B_{013}, -B_{012}, 0) (\alpha_v, \beta_v)^4 & (0, -B_{234}, B_{134}, -B_{124}, B_{123}) (\alpha_v, \beta_v)^4 \\ (B_{123}, -B_{023}, B_{013}, -B_{012}, 0) (\gamma_v, \delta_v)^4 & (0, -B_{234}, B_{134}, -B_{124}, B_{123}) (\gamma_v, \delta_v)^4 \end{pmatrix}$$

となる。すなわち、\$(x)^{\sigma\tau} = (A\_\sigma \cdot (x))^{\tau} = A\_\sigma^\tau \cdot A\_\tau \cdot (x) \neq \gamma\$。\$A\_\sigma^\tau \cdot A\_\tau = A\_{\sigma\tau}\$。つまり、\$\{A\_\sigma\}\_{\sigma \in A\_5}\$ は

1-cocycle of \$A\_5\$ with value in \$\text{GL}(2, F)\$ である。(ここで、\$F := \mathbb{k}(P(V(\rho\_4))) =

\$\mathbb{k}(\frac{1}{2}/\frac{1}{3}, \frac{1}{3}/\frac{1}{3}, \frac{1}{4}/\frac{1}{3})\$)。\$M(2, F)\$ の元 \$C\$ に対して、\$\hat{C} = \sum\_{\sigma \in A\_5} C^\sigma A\_\sigma \in M(2, F)\$

とおくと、\$\hat{C}^\tau = \sum\_{\sigma} C^{\sigma\tau} A\_\sigma^\tau = \sum\_{\sigma} C^{\sigma\tau} A\_{\sigma\tau} A\_\tau^{-1} = \hat{C} \cdot A\_\tau^{-1}\$ であるから、\$\begin{pmatrix} x'\_0 \\ x'\_4 \end{pmatrix} = \hat{C} \begin{pmatrix} x\_0 \\ x\_4 \end{pmatrix}\$

とおけば、 $(x')^\sigma = \hat{C}^\sigma(x)^\sigma = \hat{C} \cdot A_{\sigma^{-1}} \cdot A_{\sigma}(x) = (x')$  であり、 $x'_0, x'_4$  は  $A_5$ -不変である。

よって、 $\hat{C} \in GL(2, F)$  なることをとすれば、 $x'_0/x'_4$  が、残りの  $\mathbb{1}$  の生成元である。

なお、 $A_5$  の 2次元射影表現  $\theta$  の image in  $PGL(2, \mathbb{C})$  は、次のように、似たような元たちが現われて、それほどこゝ複雑なものである。(det=1とする)

$\zeta: 1$  の原始 5乗根,  $\lambda = \zeta - \zeta^4, \mu = \zeta^2 - \zeta^2$  とする。

$$\sigma = \begin{bmatrix} \zeta^3 & 0 \\ 0 & \zeta^2 \end{bmatrix}, \quad \tau = \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} \lambda & \mu \\ \mu & -\lambda \end{bmatrix}, \quad \tau_0 = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{bmatrix}, \quad \nu = \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} \lambda \zeta^2 & \mu \zeta \\ \mu \zeta^4 & -\lambda \zeta^3 \end{bmatrix}$$

とすると、

$$\theta(A_5) = \left\{ \sigma^i \tau_0^j \tau^k, \sigma^i \tau_0^j \tau_0^k, \sigma^i \tau_0^j (\nu) \tau_0^k \mid 0 \leq i \leq 4, 0 \leq j, k \leq 1 \right\}$$

となる。ここで、 $\nu$  は  $\nu$  の転置行列。

正十面体群  $\tilde{A}_5$  の既約表現は、 $A_5$  の既約表現  $1_{A_5}, P_3^+, P_3^-, P_4, P_5$  の他に、4つの忠実な既約表現  $\theta_2^+, \theta_2^-, \theta_4, \theta_6$  ( $\dim \theta_d = d$ ) をもつ。 $P(V(P))/\tilde{A}_5 = P(V(P))/A_5$  の有理性について、 $P_4$  と  $P_5$  は、今示した。 $\theta_2^\pm, P_3^\pm$  については、Klein の本 Icosa... の中で生成元の形まで explicit に調べられていて、有理性は容易にわかる。残るのは  $\theta_4$  と  $\theta_6$  だけであるが、これらは具体的には

$$\begin{cases} \theta_4: \tilde{A}_5 \xrightarrow{\theta_2^+} SL(2, \mathbb{C}) \xrightarrow{\Delta^{(3)}} SL(V(3)) = SL(4, \mathbb{C}) \\ \theta_6: \tilde{A}_5 \xrightarrow{\theta_2^+} SL(2, \mathbb{C}) \xrightarrow{\Delta^{(5)}} SL(V(5)) = SL(6, \mathbb{C}) \end{cases}$$

と表わされることから、指標を調べて確認できる。(ここで、 $\Delta^{(r)}$  は  $SL(2, \mathbb{C})$

の  $r$ -th 対称テンソル表現) まず  $\theta_6$  について、 $P(V(5))$  は principal  $PGL(2, \mathbb{C})$ -

bundle in Zariski Topology  $P(V(\theta_6)) = P(V(5)) \sim PGL(2, \mathbb{C}) \times PGL(2, \mathbb{C}) / P(V(5))$  であった。

これは  $\tilde{A}_5 \left( \begin{smallmatrix} \theta_2^+ \\ \hookrightarrow \\ SL(2, k) \end{smallmatrix} \right)$ -同変であるから  $\tilde{A}_5 \backslash \mathbb{P}(V(\theta_2)) \cong \theta_2(\tilde{A}_5) \backslash \mathbb{P}(V(5)) \sim$   
 $\tilde{A}_5 \backslash PGL(2, k) \times PGL(2, k) \backslash \mathbb{P}(V(5)) = \tilde{A}_5 \backslash \mathbb{P}(V(\theta_2^+ \oplus \theta_2^+)) \times PGL(2, k) \backslash \mathbb{P}(V(5))$  となる。

最後の式の有理性は容易にわかるので  $\theta_2$  については示された。

次に  $\mathbb{P}(V(\theta_4))/A_5$  については Mirshnichenko 氏からの手紙で  $k = \mathbb{C}$  のとき示されている。証明の概略:  $\mathbb{P}(V(\theta_4))/A_5$  は一変数有理関数体  $\mathbb{C}(x)$  上の smooth complete rational surface  $S$  with a morphism  $\varphi: S \rightarrow C$  over  $\mathbb{C}(x)$ , where  $C$  is a smooth curve over  $\mathbb{C}(x)$  with genus 0 and the generic fibre of  $\varphi$  is a smooth curve of genus 0 and  $\varphi \circ \overline{\mathbb{C}(x)}$  has three degenerate fibres と birational over  $\mathbb{C}(x)$  になることを示す。このような rational surface  $S$  は birationally trivial over  $\mathbb{C}(x)$  であることが Iskovskih 氏による rational surface の分類でわかっている。

最後に 5 次の対称群  $S_5$  について考える。  $S_5$  は単位表現  $\varepsilon$  と交代表現  $\varepsilon^-$  の他に 5 つの既約表現  $\rho_4^+, \rho_4^-, \rho_5^+, \rho_5^-, \rho_6$  ( $\dim \rho_d^\pm = d$  で  $\rho_d^- = \rho_d^+ \otimes \varepsilon^-$ ) をもつ。まず  $\rho_d^+$  と  $\rho_d^-$  は射影表現としては等しいので  $\mathbb{P}(V(\rho_d^+)) \cong \mathbb{P}(V(\rho_d^-))$  は  $S_5$ -同変である。よって  $\rho_4^+, \rho_5^+, \rho_6$  について言及すればよい。

(1)  $\rho_4^+$  について:  $\rho_4^+ \oplus \varepsilon$  は 5 次元置換表現であり、 $\mathbb{P}(V(\rho_4^+ \oplus \varepsilon))/S_5 \cong (\mathbb{P}^1)^5/S_5 \cong \mathbb{P}(V(5))$  であった。すると  $\mathbb{P}(V(\rho_4^+))/A_5$  の証明と同様の推論により  $\mathbb{P}(V(\rho_4^+))/S_5 \sim B \backslash \mathbb{P}(V(5))$  となる。ここで  $B$  は連結可解線形群なので  $B \backslash \mathbb{P}(V(5))$  の有理性は容易にわかる。具体的には binary 5-form の semi-invariant field (これは  $G_m$ -inv.) の  $G_m$ -invariant field である。



(2)  $P_5^+$  について：これは講演のとき述べたように S. Barron 氏により示されたのでその言認めさせていただきます。

(3)  $P_6$  について： $S_5$  の指標表を調べることにより、 $P_6 \otimes P_5^+ = P_4^+ \otimes P_6^- \oplus P_5 \otimes P_5^- \oplus P_6 \otimes P_6$  となる。そこで再び §1 の定理を  $G = S_5$ ,  $V_1 = V(P_6)$ ,  $V_2 = V(P_5^+)$ ,  $W = V(P_4^+)$  として使う。条件 (3) が成立することは確認しましたが、筆者には長い計算を要したので省略させていただきます。

以上により、正二十面体群  $\widetilde{A}_5$  と 5 次対称群  $S_5$  についてはすべての既約線形表現  $\rho$  (およびすべての線形表現) について、 $\mathbb{P}(V(\rho))/A_5$ 、及び  $\mathbb{P}(V(\rho))/S_5$  は有理的であることがわかりました。

#### §4.

この § では、§1 の定理の条件 (3) が  $V_1 = V(2\ell)$ ,  $V_2 = V(2\ell-2)$ ,  $W = V(2\ell-6) \oplus V(2)$  ( $\ell \geq 5$ ) としたとき成立することを説明します。

$SL(2, \mathbb{C})$  の  $m$ -th 対称テンソル表現は、 $V(m)$  の basis  $\{a_i\}_{i=0}^m$  と  $\sigma = \begin{pmatrix} \alpha & \beta \\ \gamma & \delta \end{pmatrix} \in SL(2, \mathbb{C})$  に対して、

$$\sum_{i=0}^m \binom{m}{i} a_i^\sigma x_0^{m-i} x_1^i = \sum_{i=0}^m \binom{m}{i} a_i (\alpha x_0 + \gamma x_1)^{m-i} (\beta x_0 + \delta x_1)^i$$

によって定義される。このような  $V(m)$  の basis  $\{a_i\}$  を standard ということにする。 $V(n)$ ,  $V(m)$  の standard basis を各々  $\{a_i\}_{i=0}^n$ ,  $\{b_j\}_{j=0}^m$  とし、

$$f = \sum_{i=0}^m \binom{m}{i} a_i x_0^{m-i} x_1^i, \quad g = \sum_{j=0}^m \binom{m}{j} b_j x_0^{m-j} x_1^j$$

とす。  $0 \leq d \leq n, m$  なる整数  $d$  に対して

$$(4.1) \quad \frac{(m-d)! (m-d)!}{m! m!} \sum_{p=0}^d (-1)^p \binom{d}{p} \frac{\partial^d f}{\partial x_0^{d-p} \partial x_1^p} \frac{\partial^d g}{\partial x_0^p \partial x_1^{d-p}} = \sum_{k=0}^{m+m-2d} \binom{m+m-2d}{k} c_k x_0^{m+m-2d-k} x_1^k$$

とす。  $\{c_k\}_{k=0}^{m+m-2d}$  は、  $V(n) \otimes V(m)$  の  $SL(2, \mathbb{C})$ -submodule  $V(m+m-2d)$  の standard basis になることが知られている [K]。 (4.1) の左辺を正直に言計算すると

$$(4.2) \quad \sum_{p, i, k \in \mathbb{Z}} (-1)^p \binom{d}{p} \binom{m-d}{i-p} \binom{m-d}{k-i+p} a_i b_{d+k-i} x_0^{m+m-2d-k} x_1^k$$

となる。 (こゝに  $p, q \in \mathbb{Z}$  に対して  $\binom{p}{q} = 0$  unless  $0 \leq q \leq p$ )

まず Bogomolov, Katysilo 氏 による (i)  $V_1 = V(6P+8)$ ,  $V_2 = V(2P+2) \oplus V(2P+4)$ ,  $W = V(4P+6)$  ( $P \geq 0$ ) の場合について述べます [B, K]。 (§2. Remark (5) の (ii) (iii)

についても方法は同じ)  $V(6P+8)$ ,  $V(2P+2)$ ,  $V(2P+4)$  の standard basis を各々

$\{a_i\}_{i=0}^{6P+8}$ ,  $\{b'_j\}_{j=0}^{2P+2}$ ,  $\{b''_k\}_{k=0}^{2P+4}$ ,  $V_1 \otimes V_2$  の  $G$ -submodule  $W = V(4P+6)$  のそれら  $\{f_\ell\}_{\ell=0}^{4P+6}$  とする:

$$\begin{pmatrix} f_0 \\ \vdots \\ f_{4P+6} \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} b_0 \\ \vdots \\ b'_{2P+4} \end{pmatrix} = B \begin{pmatrix} a_0 \\ \vdots \\ a_{6P+8} \end{pmatrix} \quad \left\{ \begin{array}{l} A \text{ は } (4P+7) \times (4P+8) \text{- 行列} \\ B \text{ は } (4P+7) \times (6P+9) \text{- 行列} \end{array} \right.$$

$P(V_1) \cong P^{6P+8}$ ,  $P(V_2) \cong P^{4P+7}$  の同次座標を各々  $(a_0: \dots: a_{6P+8})$ ,  $(b_0: \dots: b'_{2P+4})$

とし。

$$X := \{ (a, (b, b')) \in P(V_1) \times P(V_2) \mid f_k(a, b) = 0 \quad 0 \leq k \leq 4P+6 \}$$

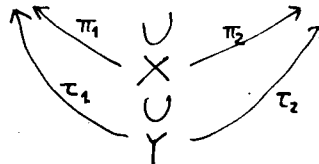
とき、  $X$  から各成分への射影を  $\pi_i: X \rightarrow P(V_i)$  とする ( $i=1, 2$ )。  $\pi_i$  は全射

であるから  $\pi_1(Y) = \mathbb{P}(V_1)$  なる  $X$  の既約成分  $Y$  をとり、 $\pi_i|_Y = \tau_i$  とおく。(下図)

このとき、 $\dim Y = 6P+8$ 、かつ、 $\pi_2(Y) = \mathbb{P}(V_2)$   $\mathbb{P}^{6P+8} = \mathbb{P}(V_1) \leftarrow \mathbb{P}(V_1) \times \mathbb{P}(V_2) \rightarrow \mathbb{P}(V_2) = \mathbb{P}^{4P+7}$

なることを示せば定理の条件(3)が

成立つことがわかるので以下これを示す。



彼らは次の簡単な事実に着目したので証明に計算が殆ど不要になった：

Fact  $\mathbb{P}(V_2)$  の任意の点  $x = (b, b')$  に対して、 $x$  の  $G := \mathrm{PGL}(2, \mathbb{C})$ -orbit の閉包は、

(1)  $b' = 0$  ならば、点  $P = (0:0:\dots:0:b_{2P+2}:0:\dots:0)$  を含む。

(2)  $b' \neq 0$  ならば、点  $Q = (0:0:\dots:0:0:0:\dots:0:b'_{2P+2})$  を含む。

一方、(4.2) から容易に、 $f_2(\alpha, P) = \lambda_\ell \alpha_\ell$  ( $0 \leq \ell \leq 4\ell+6$ ,  $0 \neq \lambda_\ell \in \mathbb{C}$ ),  $f_2(\alpha, Q) = 0$  ( $\ell=0$ ),  $= \mu_\ell \alpha_{\ell-1}$  ( $1 \leq \ell \leq 4P+6$ ,  $0 \neq \mu_\ell \in \mathbb{C}$ ) の形になることがわかる。つまり

$$B(P) = \begin{pmatrix} \lambda_0 & & & & \\ & \lambda_1 & & & \\ & & \ddots & & \\ & & & \lambda_{4P+6} & \\ & & & & 0 \end{pmatrix}, \quad B(Q) = \begin{pmatrix} 0 & & & & \\ \mu_1 & & & & \\ & \mu_2 & & & \\ & & \ddots & & \\ & & & \mu_{4P+6} & \\ & & & & 0 \end{pmatrix}$$

となる。よって、 $\pi_2^{-1}(P) \cong \mathbb{P}^{(6P+8)-(4P+7)} = \mathbb{P}^{2P+1}$ ,  $\pi_2^{-1}(Q) \cong \mathbb{P}^{(6P+8)-(4P+6)} = \mathbb{P}^{2P+2}$  である。

(i)  $\tau_2(Y) \ni P$  とすると fibre の次元の上半連続性より  $\dim Y \leq \dim \tau_2(Y) + \dim \tau_2^{-1}(P) \leq (4P+7) + (2P+1) = 6P+8$  であるから、 $\pi_1(Y) = \mathbb{P}(V_1) \cong \mathbb{P}^{6P+8}$  より、

$\dim Y = 6P+8$ ,  $\dim \tau_2(Y) = 4P+7$  となり OK。

(ii)  $\tau_2(Y) \not\ni P$  とすると、Fact (1) より、 $\tau_2(Y) \ni Q$  に対して  $b' \neq 0$  である。よって Fact (2) より、 $\tau_2(Y) \ni Q$ 。また、 $L := \{(b, 0) \in \mathbb{P}(V_2) \mid b \in V(2P+2)\} \cong \mathbb{P}^{2P+2}$  とおくと、

$\tau_2(Y) \cap L = \emptyset$  in  $\mathbb{P}^{4P+7} = \mathbb{P}(V_2)$  であるから、 $\dim \tau_2(Y) \leq (4P+7) - (2P+2) - 1 = 2P+4$ 。

よって (i) と同じ推論により,  $6P+8 \leq \dim Y \leq \dim \tau_2(Y) + \dim \tau_2^{-1}(Q) \leq (2P+4) + (2P+2)$   
 $= 4P+6$  よって  $2P+2 \leq 0$  となり,  $P \geq 0$  に矛盾。

次に (4.2) で  $(m, m, d) = (2l, 2l-2, l+2), (2l, 2l-2, 2l-2)$  とし,  $V(2l) \otimes V(2l-2)$   
 の  $G := \mathrm{PGL}(2, \mathbb{C})$ -sub module  $W := V(2l-6) \oplus V(2)$  の basis  $\{f_k\}_{k=0}^{2l-3}$  を計算すると

$$(4.3) \quad \begin{cases} f_k = \sum_i \lambda_{ki}^{(l)} a_i \otimes b_{2l+2+k-i}, & \lambda_{ki}^{(l)} = \sum_P (-1)^P \binom{l+2}{P} \binom{l-2}{i-P} \binom{l-4}{k-i+P} \quad \text{for } 0 \leq k \leq 2l-6 \\ f_{2l-5+k} = \sum_P \mu_P^{(l)} a_{k+P} \otimes b_{2l-2-P}, & \mu_P^{(l)} = (-1)^P \binom{2l-2}{P} \quad \text{for } k=0,1,2 \end{cases}$$

となる。  $\mathbb{P}(V(2l))$  の点  $(a) = (a_0 : \dots : a_{2l})$  とし

$$(4.4) \quad \begin{cases} a_i = 0 \quad \text{for } i \neq 2, l+1, 2l \\ a_2, a_{l+1}, a_{2l} \text{ は } \mathbb{C} \text{ の一般的な元} \end{cases}$$

をとる。この  $(a)$  に対して  $\mathbb{P}(V(2l-2))$  の点  $(b) = (b_0 : \dots : b_{2l-2})$  とし

$$(4.5) \quad \begin{cases} b_j = 0 \quad \text{for } j \neq 0, l-1, 2l-2 \\ (b_0 : b_{l-1} : b_{2l-2}) = \left[ \left\{ \lambda + (-1)^l \binom{l-2}{2} \binom{2l-2}{l-1} \right\} a_2 a_{l+1} : \left\{ \binom{l-2}{2} - (-1)^l \right\} a_2 a_{2l} : \left\{ \lambda + \binom{2l-2}{l-1} \right\} a_{l+1} a_{2l} \right] \\ \text{ここで: } \lambda := \lambda_{l-2, l+1}^{(l)} = \sum_P (-1)^P \binom{l+2}{P} \binom{l-2}{P-3} \binom{l-4}{P-3} \end{cases}$$

をとる。すると,  $f_k(a, b) = 0$  ( $0 \leq k \leq 2l-3$ ) として,  $\mathrm{rank} A(a) = \mathrm{rank} B(b) = 2l-2$

となることを, 以下説明しよう。(行列  $A, B$  の定義は §1 の定理を参照)

と思っただけなのにこの証明には, 筆者には長い計算を要しましたし,

しかも先に示したように, Bogomolov, Katzysilo 氏による殆んど計算を

要しない証明がありましたので, 根拠略だけを述べさせていただきます。

まず

Lemma 1  $\lambda_{k,2}^{(l)} \neq 0$  for  $l \geq 5$ ,  $0 \leq k \leq l-2$  except  $(l,k) = (5,1), (8,2)$

となる。ここで

$$\lambda_{k,2}^{(l)} := \binom{l+2}{2} \binom{l-4}{k} - (l^2-4) \binom{l-4}{k-1} + \binom{l-2}{2} \binom{l-4}{k-2}$$

Lemma 2  $P(V(2l))$  の基底 (a) で (4.4) を満たすものに対して,  $(2l-2) \times (2l-1)$ -行列  $A(a)$  の  $(2l-2)$  列を除いた,  $(2l-2)$  次行列の行列式  $\Delta$  は

$$\Delta = \prod_{k=0}^{l-5} \begin{vmatrix} \lambda_{k,l+1} a_{l+1} & \lambda_{k,2} a_2 \\ (-1)^k \binom{l-4}{k+1} a_{2l} & \lambda_{l-1+k,l+1} a_{l+1} \end{vmatrix} \cdot \nabla_1(l) \cdot \{-\nabla_2(l)\} \cdot \{-\nabla_3(l)\} \cdot a_2^2 a_{l+1}^2 a_{2l}^2$$

となる。ここで

$$\begin{cases} \nabla_1(l) = \binom{2l-2}{2} \lambda_{l-4,l+1} + (-1)^l \binom{2l-2}{l-3} \lambda_{l-4,2} \\ \nabla_2(l) = (2l-2) \cdot \lambda_{l-3,2} + (-1)^l \binom{2l-2}{2} \lambda_{l-3,2} \\ \nabla_3(l) = \lambda_{l-2,l+1} + \binom{2l-2}{l-1} \quad (\lambda_{\cdot,\cdot} \text{ の定義は (4.3)}) \end{cases}$$

すると, Lemma 1 より  $\lambda_{k,2} \neq 0$  ( $0 \leq k \leq l-5$ ) であり,  $a_2, a_{l+1}, a_{2l}$  は general として

いたので

$$\prod_{k=0}^{l-5} \begin{vmatrix} \lambda_{k,l+1} a_{l+1} & \lambda_{k,2} a_2 \\ (-1)^k \binom{l-4}{k+1} a_{2l} & \lambda_{l-1+k,l+1} a_{l+1} \end{vmatrix} \neq 0$$

がわかる。  $\nabla_i(l) \neq 0$  はあとで示す。

Lemma 3  $P(V(2l-2))$  の基底 (b) で (4.5) を満たすものに対して

$$\begin{cases} b_0, b_{l-1}, b_{2l-2} \neq 0 \\ f_k(a,b) = 0 \quad (0 \leq k \leq 2l-3) \end{cases}$$

が直接計算してわかる。

Lemma 4  $P(V(2l-2))$  の表(b)で (4.4) をみたすものに対して,  $(2l-2) \times (2l+1)$ -行列  $B(b)$  の  $\#(2l-1)$ ,  $\#2l$ ,  $\#(2l+1)$ -列を除いて得る  $(2l-2)$  次行列の行列式  $\Delta'$  は,

$$\Delta' = \prod_{k=0}^{l-5} \left| \begin{array}{cc} \lambda_{k,3+k} b_{2l-1} \cdot (-1)^k \binom{l-2}{k} b_0 & \\ \binom{l-2}{3+k} b_{2l-2} \cdot \lambda_{l+1+k, l+2+k} b_{l-1} & \end{array} \right| \cdot \nabla_1'(l) \cdot \nabla_2'(l) \cdot \nabla_3'(l) \cdot b_{l-1}^3 b_{2l-2}^3$$

と存る。ここで,

$$\begin{cases} \nabla_1'(l) = \lambda_{l-4, l-1} + (-1)^l \binom{2l-2}{l-1} \\ \nabla_2'(l) = \lambda_{l-3, l} + (-1)^l \cdot (l-2) \binom{2l-2}{l-1} \\ \nabla_3'(l) = \lambda_{l-2, l+1} + (-1)^l \binom{l-2}{2} \binom{2l-2}{l-1} \end{cases}$$

すると,  $b_0, b_{2l-2} \neq 0$  ( $\because$  Lemma 3) と,  $a_2, a_{l+1}, a_{2l}$  は general であることから

$$\prod_{k=0}^{l-5} \left| \begin{array}{cc} \lambda_{k,3+k} b_{2l-1} \cdot (-1)^k \binom{l-2}{k} b_0 & \\ \binom{l-2}{3+k} b_{2l-2} \cdot \lambda_{l+1+k, l+2+k} b_{l-1} & \end{array} \right| \neq 0$$

がわかる。よって結局,  $\nabla_i(l) \neq 0, \nabla_i'(l) \neq 0$  ( $i=1, 2, 3$ ) を示すことに帰着する。 ( $b_{2l} \geq 5$ )。  $\nabla_i(l), \nabla_i'(l)$  を少し簡単にすると,

$$\begin{cases} \nabla_1(l) = \binom{2l-2}{2} \cdot \tau(l) + (-1)^l \binom{2l-2}{l-3} \cdot (l-1)(l-5)(l^2-12l+12)/4 \\ \nabla_2(l) = (2l-2) \cdot \omega(l) + (-1)^l \binom{2l-2}{l-2} \binom{l-1}{2} (l-8) \\ \nabla_3(l) = \lambda(l) + \binom{2l-2}{l-1} \\ \nabla_1'(l) = (-1)^l \cdot \nabla_3(l) \\ \nabla_2'(l) = \mu(l) + (-1)^l \binom{2l-2}{l-1} (l-2) \\ \nabla_3'(l) = \lambda(l) + (-1)^l \binom{2l-2}{l-1} \binom{l-2}{2} \end{cases}$$

$$\text{ここで、} \begin{cases} \tau(\ell) := \lambda_{\ell-4, \ell+1} = \sum_{P \in \mathbb{Z}} (-1)^P \binom{\ell+2}{P} \binom{\ell-2}{P-3} \binom{\ell-4}{P-5} \\ \nu(\ell) := \lambda_{\ell-3, \ell+1} = \sum_P (-1)^P \binom{\ell+2}{P} \binom{\ell-2}{P-3} \binom{\ell-4}{P-4} \\ \lambda(\ell) := \lambda_{\ell-2, \ell+1} = \sum_P (-1)^P \binom{\ell+2}{P} \binom{\ell-2}{P-3} \binom{\ell-4}{P-3} \\ \mu(\ell) := \lambda_{\ell-3, \ell} = \sum_P (-1)^P \binom{\ell+2}{P} \binom{\ell-2}{P} \binom{\ell-4}{P-3} \end{cases}$$

と書いた。つまり 2項係数の3つの積の交代和 が出てくる。これは、  
組合論の恒等式 ( $a, b, c \in \mathbb{N}$ )

$$\sum_{k=-p}^p (-1)^k \cdot k^r \binom{a+b}{b+k} \binom{b+c}{c+k} \binom{c+a}{a+k} = \begin{cases} \frac{(a+b+c)!}{a!b!c!} & \text{for } r=0 \\ -\frac{(a+b+c-1)!}{(a-1)!(b-1)!(c-1)!} & \text{for } r=2 \\ 0 & \text{for } r=1, 3 \end{cases}$$

$$\sum_{k=-p}^{p+1} (-1)^k \cdot k^r \binom{a+b+1}{b+k} \binom{b+c+1}{c+k} \binom{c+a+1}{a+k} = \begin{cases} 0 & \text{for } r=0 \\ \frac{(a+b+c+1)!}{a!b!c!} & \text{for } r=1, 2 \\ \frac{(a+b+c)!}{(a-1)!(b-1)!(c-1)!} - \frac{(a+b+c+1)!}{a!b!c!} & \text{for } r=3 \end{cases}$$

を使うことにより、 $\forall m \geq 2$  に于いて

$$\tau(2m+1) = (-1)^{m+1} \binom{3m}{m+1, m-1, m-1} \cdot \frac{3(2m+3)}{(m+1)(2m+1)(2m-1)}$$

$$\tau(2m+2) = (-1)^{m+1} \binom{3m+1}{m+1, m+1, m} \cdot \frac{4m^3 + 8m^2 - 11m - 6}{(2m+1)(2m+3)}$$

$$\nu(2m+1) = (-1)^m \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \cdot \frac{3}{2} \cdot \frac{(2m+3)}{(2m+1)}$$

$$\nu(2m+2) = (-1)^{m+1} \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \frac{3(m+4)(3m+1)}{(m+1)(2m-1)}$$

$$\lambda(2m+1) = (-1)^m \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \frac{3(2m+3)}{2(2m-1)}$$

$$\lambda(2m+2) = (-1)^m \binom{3m+1}{m+1, m, m} \frac{2m^2+m+2}{(2m-1)(2m+1)}$$

$$\mu(2m+1) = 0$$

$$\mu(2m+2) = (-1)^m \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \frac{6(2m+3)(3m+1)}{(2m-1)(2m+1)}$$

となる。こゝで:  $a, b, c \in \mathbb{N}$  に対して  $(b, c, d) = a! / b!c!d!$  と  $t=0$  と  $t > 0$ .

$$\nabla_1(2m+1) = \binom{4m}{2} (-1)^{m+1} \binom{3m}{m+1, m-1, m-1} \frac{3(2m+3)}{(m+1)(2m-1)(2m+1)} - \binom{4m}{2m-2} m(m-2)(4m^2-20m+1),$$

$$\nabla_1(2m+2) = \binom{4m+2}{2} (-1)^{m+1} \binom{3m+1}{m+1, m+1, m} \frac{4m^3+8m^2-11m-6}{(2m-1)(2m+3)} + \binom{4m+2}{2m-1} (2m+1)(2m-3)(m^2-4m-2),$$

$$\nabla_2(2m+1) = 4m \cdot (-1)^m \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \frac{3(2m+3)}{2(2m+1)} - \binom{4m}{2m} \binom{2m}{2} (2m-7),$$

$$\nabla_2(2m+2) = (4m+2) (-1)^{m+1} \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \frac{3(m+4)(3m+1)}{(m+1)(2m-1)} + \binom{4m+2}{2m} \binom{2m+1}{2} (2m+6),$$

$$\nabla_3(2m+1) = (-1)^m \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \frac{3(2m+3)}{2(2m-1)} + \binom{4m}{2m},$$

$$\nabla_3(2m+2) = (-1)^m \binom{3m+1}{m+1, m, m} \frac{2m^2+m+2}{(2m-1)(2m+1)} + \binom{4m+2}{2m+1},$$

$$\nabla_1'(2m+1) = -\nabla_3(2m+1),$$

$$\nabla_1'(2m+2) = \nabla_3(2m+2),$$

$$\nabla_2'(2m+1) = -\binom{4m}{2m},$$

$$\nabla_2'(2m+2) = (-1)^m \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \frac{6(2m+3)(3m+1)}{(2m-1)(2m+1)} + 2m \binom{4m+2}{2m+1},$$



$$\nabla'_3(2m+1) = (-1)^m \binom{3m-1}{m+1, m-1, m-1} \frac{3(2m+3)}{2(2m-1)} - \binom{4m}{2m} \binom{2m-1}{2}$$

$$\nabla'_3(2m+2) = (-1)^m \binom{3m+1}{m+1, m, m} \frac{2m^2+m+2}{(2m-1)(2m+1)} + \binom{4m+2}{2m+1} \binom{2m}{2}$$

となる。そこで  $l \leq 40$  ぐらいまでの  $\nabla_1(l), \dots, \nabla'_3(l)$  の値を計算機で  
出してみると、確かに 0 となることはなかった。最後に

Lemma 5 有理数係数の任意の有理関数  $F(x) \in \mathbb{Q}(x)$  に対して、

$$\binom{3m}{m, m, m} > F(m) \cdot \binom{4m}{2m} \quad \text{for } m \gg 0$$

であることに注意すれば、すべての  $l \geq 5$  に対して、0 にならないこと  
は、容易に想像がつく。

### §5. $S_5$ と $A_5$ の generic polynomial について

無限体  $k$  と有限群  $G$  が given とする。右上の  $m$  変数有理関数体  
 $k(x_1, \dots, x_m)$  を係数とする、 <sup>$k(x_1, \dots, x_m)$  上での</sup> 既約、分離多項式  $P(t) \in k(x_1, \dots, x_m)[t]$   
の、 $k(x_1, \dots, x_m)$  上の Galois 群は  $G$  に同型とする。このとき、

Def [D]  $P(t)$  が generic polynomial for  $G$  over  $k$  とは、

For any extension field  $K$  of  $k$  and any Galois field extension  
 $L$  of  $K$  whose Galois group  $H$  is a subgroup of  $G$ , there is a

substitution  $x_i \mapsto \beta_i$  with  $\beta_i \in K$  sending  $P(t)$  to a separable polynomial  $g(t) \in K[t]$  such that  $L$  is the splitting field of  $g(t)$  over  $K$ . とする。

例えば、 $k = \mathbb{Q}$  有理数体とすると、 $P(t) = t^m + x_1 t^{m-1} + x_2 t^{m-2} + \dots + x_m$  は  $m$  次対称群  $S_m$  に対する generic polynomial over  $\mathbb{Q}$  の 1 つである。このこと、 $P^5 \rightarrow P^5/PGL(2, k)$  の rational section を具体的に書下すことにより、次のことがわかる。(計算は省略)

$$(1) \quad t^5 + \frac{-5}{4} \frac{(a^2+3b)}{a(1-3a)} \cdot t^4 + \frac{-a^3b + \frac{a(a^2-b)}{2} - 9b}{a^2(1-3a)} \cdot t^3 + \frac{\frac{-a^2(a^2-b)}{4} + \frac{(a^2-b)^2}{4^2} + 6ab}{a^3(1-3a)} \cdot t^2 \\ + \frac{\frac{a(a^2-b)^2}{4^2} + \frac{(3a^2-b)b^2}{2}}{a^4(1-3a)} \cdot t + \frac{\frac{(a^2-b)^3}{4^3} + \frac{ab^2(a^2-b)}{2} + 9 \cdot b^4}{a^5(1-3a)}$$

は、5 次対称群  $S_5$  の generic polynomial over  $\mathbb{Q}$  で、2 つのパラメータ  $a, b$  をもつもの (つまり  $m=2$ ) の、1 つである。

(2) (1) で、 $a \mapsto (1-a^2)/2$  としたものは、5 次交代群  $A_5$  の generic polynomial over  $\mathbb{Q}$  の 1 つである。

1 つのパラメータをもつ 5 次式で、上の性質をもつものがあるかどうか筆者にはわからない。

## 文献

- [K] P.I. Katysilo, The rationality of moduli spaces of hyperelliptic curves  
Math. USSR. Izv. 25 (1985) 45-50
- [B] F.A. Bogomolov, Rationality of the moduli of hyperelliptic curves of  
arbitrary genus, preprint
- [B.K] F.A. Bogomolov, P.I. Katysilo, Rationality of some quotient varieties,  
Math. USSR Sbornik 54 (1986) 571-576
- [S] T. Shioda, On the graded ring of invariants of binary octavics,  
Amer. J
- [D] F. DeMeyer, Generic Polynomials, J. of Alg. 84 (1983) 441-448